

私の召出の歩み

第1巻

イエズス会入会から上智大学赴任まで（1942-1959年）

序文

上智大学にポルトガル・ブラジル研究センターを1959年に創設され、5年後の1964年、同大学ポルトガル語学科の創設者ともなられたヴェンデリーノ・ローシャイタ神父が、イエズス会士になられて50周年を迎えたのは1992年のことでした。

ローシャイタ神父は1992年、当時ポルトガル・ブラジル研究センターが年2回発行していた *Noticias do Japão* にイエズス会士としての軌跡を回顧する自伝の掲載を開始され、1998年に *Notícias do Japão* が *Encontros Lusofonos* という年1回発行の紀要に姿を変えるまで連載して頂きました。

この度、ポルトガル・ブラジル研究センターは、以前 *Noticias do Japão* に掲載された1942年から1959年までの活動に関する連載分を1冊にまとめて刊行することになりました。イエズス会士としての歩みを振り返るこの自伝を通し、私達はローシャイタ神父の偉大な足跡を知ることができるでしょう。

今回刊行する第1巻では、ローシャイタ神父が1942年にイエズス会に入られ、第2次世界大戦後間もない1949年、まだ占領下の日本に宣教師としての第一歩をしるし、1951年に始まるヨーロッパでの神学の勉強と修練期間を経て、1957年再び広島に戻られ、1959年に東京での活動を開始するまでの年月が綴られています。

元ポルトガル・ブラジル研究センター所長にして、上智大学名誉教授でもあられる水野一氏には監訳を快く引き受けていただきました。また、同センター秘書の依田寿美子さんは多忙な勤務の合間に翻訳という困難な作業を担当してくれました。記してここで感謝いたします。なお、本書で言及される方々の役職や肩書きについては、現在のものと異なる場合があることをお断りしておきます。

2001年12月
ポルトガル・ブラジル研究センター
所長 市之瀬敦

私の召出の歩み

第1巻

イエズス会入会から上智大学赴任まで (1942-1959年)

1992年の訪れは、私にとって特別の意味がありました。1991年が終わり、1992年が始まったちょうど真夜中、住まいの近くにあるイグナチオ教会の鐘が鳴り響いた時、50年前にイエズス会に受け入れていただいたことに感謝しつつ、さらに1年イエス様にお仕えすることを誓いました。私がイエズス会に入ったのは1942年2月28日、リオグランデドスル州の懐かしいパレシ・ノーヴォで修練士だった時の事です。

修練院での仲間のあたたかい励ましや、修道院長の方々のご親切により、1992年2月28日、50年前と同じ礼拝堂で行われた感謝のミサに参加することができました。ミサは管区長であるジョアン・ロケ・ロール神父の司式により、私と同じく在職50年を迎えた11人によってとり行われました。1942年当時、修練院には若者もそうでない方も含めて23人おりましたが、そのうち現在もイエズス会で活動している15人の中で当日出席できたのは11人でした。

このミサが私の50周年の最大の祝賀となりました。私はここで再び、2月6日から3月14日までの渡伯期間でイエズス会内外を問わず、様々な場所で開催していただいたお祝いに心より感謝申し上げます。ここに全ての人々の名前をあげることはできませんが、ご参集いただいた全ての方々に神の祝福があることを祈ってやみません。心に残る忘れがたい経験となりました。

多くの方々が是非とすすめて下さったので、私のイエズス会士としての伝道史をかいつまんで書き残すことにします。もちろん、ここではこうした道のりの始めの部分しか書けないでしょう。

私は1924年3月2日、リオグランデドスル州のサン・ジョゼ・ド・オルテンシオで生まれました。両親と家族の深い信仰心と私が永年にわたって侍者として仕えた教区司祭の模範があったからこそ、私は聖職者としての道を歩み始めたのだと思います。1935年、サンレオポルド(のちのグラヴァタイ)小神学校に入学しました。『聖フランシスコ・ザビエルの生涯』を読み、イエズス会士になろうと思い始めました。いくつもの困難を乗り越え、1941年、サルヴァドール・ド・スル司牧学校(イエズス会志願者のための学校)に入学しました。1942年パレシ・ノーヴォにて修練士となりました。1944年、初めて神への請願をしました。そしてやはりパレシ・ノーヴォでユニオラトウス(哲学専攻前の予科生)として古典やギリシャ・ラテンの言語文学を学びました。その後、1946年から1948年までリオグランデドスル州サンレオポルドのクリスト・レイ大学で哲学を学びました。

ユニオラトウスの時より既に海外布教への希望を持っていました。哲学を学ぶなかでこの希望はますます強まり、気持ちはアフリカへの伝道に傾いていました。1947年、日本での布教にあたっていたイエズス会士たちの管区長であったウーゴ・ラサール神父がサンレオポルドの哲学・神学院に到着し、日本での伝道を依頼したのです。彼は、敗戦国日本が物質的に困難な状況に追い込まれていることや、だからこそキリスト教布教の好機なのであるといったことを話され、宣教師が充分にいれば日本は比較的短期間に改宗するであろうとおっしゃったのでした。これは今日でもまだ実現していない見方です。それまで日本について考えたこともありませんでした。しかし、私達の管区長が、日本への渡航に興味のある者は名前を書いて提出するようと言ったとき、私は躊躇してしまいました。そして管区長にアフリカにきたいという私の希望を伝えに行きました。すると彼は「今はアフリカのことは考えていない。伝道に行

きたいのならば日本に行きなさい。」とはっきり言ったのです。この伝道にはきっと適任者が他に多くいると思いながら、不承不承ではありましたが、名前を書いて提出しました。しかし数日後、管区長から呼ばれ、「おめでとう。君は日本への布教に選ばれた3人のうちの1人になったよ。もう準備はできているかい？」と言われた時はショックでした。しばらくは当惑して押し黙ってしまい、一言も発することができませんでした。管区長はそんな私を理解してくださり、「今すぐに答えをださなくてもいいですよ。とても重要な決意をするわけだから、1日2日、よく考え祈ってそれからまた私のところへ来なさい」と優しく言ってくれました。宗教的生活とは何かや、今まで神が導いてくださった道、宣教師になるという本当の意味、神の意志に従っていくということ、キリストの呼ぶ声に耳をすませることなどについて思索を重ねました。聖書に書かれている一節や聖人たちの生涯、特にやはり最後には日本に行った聖フランシスコ・ザビエルの生涯が頭をよぎりました。こうした思索によって私は落ち着きを取り戻し心が穏やかになって、管区長たちによって示された神の意志に従っていこうと祈るようになったのです。

決意を胸に、日本への渡航の準備が整ったことを報告するために再び管区長の元に行きました。彼は私に感謝し励ましてくれました。そしてあとの2人も日本行きを決心したと教えてくれました。

しかし間もなくもう一つのショックが訪れました。管区長に「それでは決意が固まったところで、渡航の準備や日本への行き方を考えてください。私は経済的な面も含め、あなたたちを助けることはできない。君たちに家族や親戚、知人に別れを告げるため、また旅費を調達するために帰郷することを許可します」と言われた時でした。

正直言って、このようなことになるとは思っていませんでした。きっと他の2人も私と同じ思いであったと思います。少なくとも、まだ若い学生で経験が無く、自分の生まれた州から一步も出たこともないような私が、神秘に包まれた日本、ラサール神父が私達に話してくれたことや地球の反対側にあるといったことしか知らない日本にどうやって行くかなどわからうはずもありませんでした。

(しかしながら、その後、管区長はなぜこのような態度をとったのかを私に教えてくれました。彼は、私達が目的地への道や方法を探しだそうとの積極的な思いがあるかどうかを見たかったそうです。必要であれば手助けしようとして下さっていました。「人を頼ってはいけない。また自分でできるのに人がやってくれるのを待っているようではいけない」との彼の言葉が忘れられません。)

いずれにしても、早速仕事にとりかかかなければなりませんでした。ポルトアレグレやブラジル南部では日本に行くための正確な情報を得にくかったので、私達はまずサンパウロとリオデジャネイロに行くことにしました。そこならば情報があると思ったからです。

しかしその前に、旅費と宣教に必要なもの以外に日本に持っていくための身の回りの品を確保することが先決でした。一年前に日本に行ったイエズス会の4人の仲間が、「日本は全てが不足しているから、できるだけ多くものを持って来てください」と書いてきたからです。

こうして私達の東奔西走が始まったのです。私たち3人は一人ひとり散っていきました。私はそれまで両親や兄弟などに日本に宣教に行くとは伝えていなかったのも、もっと詳しく説明するためにまず実家に帰ってしばらく過ごしました。ブラジルでも神父が不足しているこの時期に、彼らが私の決意を理解するのは難しかったようです。無理ありません。できるだけ上手に説明するよう努めました。宣教の意味、日本での教会の必要性、聖職者としての使命、特にイエズス会士は世界のいかなる場所でも、ローマ法王や管区長の望む場所に行く心構えが必要であることなどを説明しました。また、今度のことは、私が自ら志願したことであって神が私をお導きくださった結果であるとも言いました。間もなく皆

賛成してくれ、できるだけ協力するという気持ちがあることを伝えてくれました。あまり財産のない家族だったので、どこに、どうやって、誰を訪ねれば支援してもらえるのかといった、私なりの行動計画も立てました。当時、田舎では最も一般的で合理的な旅行手段はロバや馬だったのです。父は私に馬を貸してくれ、私は将来日本の宣教師になるために、その馬で一带にある村や集落をまわりました（幸運なことに、私は馬で小学校に通っていたので、馬には慣れていたので）。

やがて訪問の主旨を説明するのにも慣れ、寄付も増えていきました。農村をまわったあと、今度はサンレオポルド、ノーヴォ・アンプルゴ、ポルトアレグレといった都市に目を付けました。ノーヴォ・アンプルゴではいくつかの靴工場を廻り、靴用の皮をいれた箱を数個いただきました。日本でこの箱を開けたとき、こんな大きな皮を見たことが無かった他の宣教師や日本人があっけにとられていたのを覚えています。これで多くの靴を作ることができたので、とても嬉しかったです。さらにノーヴォ・アンプルゴではパイプオルガンとオルガンの工場主が、小さなポータブルのオルガンをくれました。このオルガンは長年にわたって、横須賀の田浦にあるイエズス会士の日本語学校の礼拝堂で歌の伴奏に使いました。ポルトアレグレでは、有名な大企業家を訪問しました。彼は私達の説明をよく聴いてくれ、「旅費を全部出して差し上げたいのですが、支援を求めにくる人がたくさん居るため全額は無理です。でもせめて、一部は負担しましょう」と言い、多額の寄付をしてくれました。

寄付はかなり集まったのですが、これで日本に行くのに充分なのか、それともまだ足りないのか検討もつきませんでした。まだ行き方さえわからなかったのですから。いずれにしても、まず最初の旅への出発が迫ってきていました。まずサンパウロ経由でリオに向かうのです。いくつかの可能性を探り、ポルトアレグレからサンパウロまでは鉄道を使うことにしました。サンタ・マリア、マルセリノ・ラモスを通り、サンタカタリナ州、パラナ州を縦断する線です。各駅停車のためサンパウロに到着するのに 2 日、あるいはそれ以上時間がかかりました。しかし列車内の設備が良かったので愉快で快適な旅ができました。こうして日本への旅が始まったのです。

サンパウロ

日本への旅を始めたのは哲学の勉強を終えた 25 歳の時でした。列車での長い、しかし快適で愉快的な旅の末、私たち 3 人は健康を損ねることもなく無事にサンパウロに到着しました。私には故郷の州境を越えることすら初めての経験だったので、目の前に少しずつ新しい世界が開けてきて、私を好奇心と、感嘆と、自分を待ち受けるものへの多少の不安で覆ったのでした。

サンパウロでは聖フランシスコ・ザビエル学院のイエズス会士たちの暖かい歓迎を受けました。この有名な学院は特に日本移民とその子弟を教育するために創設されました。私はここで、何人かのイエズス会士を含め、初めて日本人と接触しました。皆さん親切で優しい方々でしたが、これから私たちが彼らが後にした国、人によってはもう何年も昔に後にした日本に行くということで、感嘆と嫉妬の目を向けていました。サンパウロでは日本についてより詳しい情報を得ることができました。日本語に関してはあまり心配することはないが、少なくとも戦後日本で一般的に使用されるようになった英語は少し覚え方がよいと言われました。

また、ブラジルから日本への行程に関しては、もっと詳しい情報を得られるリオを経由していくべきだとの助言を得ました。

リオデジャネイロ

こうしてキリスト像がコルコパードの丘に立つリオデジャネイロにやってきました。このキリスト像は私たちが両手を広げて歓待すると同時に、遠い日本を指し示しているように思えました。この時、修練院の時代に選んだ人生の目標と、イエスが聖ペトロを導いた時の言葉である、「沖にのりだして」（ルカによる福音書 第5章 第4節）との最初の誓願を思い出しました。

日本への旅の行程を具体的に計画し始めました。英語を覚えた方がいいとの助言に従い、まずアメリカ合衆国を経由することにしました。リオにある書店で英語の文法書を買って、勉強を開始しました。

合衆国への行き方に関する情報の収集に駆けずり回っていた私たちに、CAN(ブラジル航空郵便)を使えばいいと教えてくれる方がいました。CANの飛行機は合衆国への定期便があるし、郵便はもちろん、スペースがある時は乗客も扱っているとのことでした。飛行機は小型双発機で収容できる乗客は10人前後、機内の内壁に沿って二列ずつ座席があったことをよく覚えています。最も助かったのは全く料金がかからなかったことです。もちろん機内サービスなどはありません。私達は早速情報を求めに行き、何便か後の座席を確保することができました。

こうして出発の時が来ました。席にきちんと座り、シートベルトをしっかりと締めました。私達3人の宣教師の他に何人か乗客がいました。最初の目的地であるベレンに着く途中で一度着陸しましたが、場所は覚えていません。そこで食べ物を調達しました。なにせ機内サービスはありませんでしたから。しかしながら度々着陸していたので、特に困ったことはありませんでした。ベレンでは空軍基地の施設に泊りました。その飛行機はブラジル空軍の所有だったからです。

ブラジルとの別れ

ついに、ベレンで私たちはブラジルに別れを告げました。しかし別れの気持ちは、私達とは違う言葉で話す異なる人々と暮らす未知の国で、どんな未来が待ち受けているのかといった気持ちに押し寄せ気味でした。祈ることといえば、神と聖母アパレシーダがブラジルに、家族や親戚に、そして管区長や同志のような慈善家に祝福を与えてくださるよということだけでした。また、この旅が神の最大の栄光と魂の救いとなることを祈りました。なぜならまさにそれこそが私達の計画の目的であったからです。

次の経由地はトリニダードでした。もう外国です。しかしとりIたてて変わったことはありませんでした。旅は進み、プエルトリコに着きました。ここでも全て順調で、私たちはもう席に座り離陸への準備は整っていました。その時、パイロットが来て言ったのです。「皆さん、エンジンに不審音があります。ちょっと見てきたほうがいいと思います。飛行機から降りて出発の指示を待っていただけますか。少々時間がかかりそうなので」。

私の隣に座っていたブラジル人の青年の反応を今でも覚えています。カンカンに怒って抗議したのです。

「何だって！行こうじゃないか。こいつを前に動かしてくれよ。アメリカ、マイアミまではあとひとつ飛びじゃないか」。一人、二人と彼の抗議に唱和しました。するとパイロットは静かに言いました。「わかりました。あなたたちがそう言い張るのなら行きましょう。ただし、私は責任を負えないし、マイアミに到着する保証もないですよ。海に墜落してしまう可能性も高い。そして…。彼の言葉は乗客を黙らせ、あの興奮した青年も含め皆がパイロットに従ったほうが良いと思わせたのでした。あのまま旅を続けていたら、いまこうして回想録を書くことはできなかったでしょう。私たちは幸運でした。後にわかったことですが、エンジンの故障はひどく、交換部品の調達のため私達はプエルトリコで2日間足止め

を食らいました。神とパイロットに感謝し、私達は決意新たに、このマイアミ経由の飛行機の最終目的地ワシントンまで、残された旅が無事であるよう神のご加護を祈りました。

アメリカ合衆国

アメリカに到着したときの最大のショックは、頭では承知していたのですが、ポルトガル語が本当に通じないということでした。しかし何かを抽象的に知っているのと、具体的にその事実を自分の肌で感じるというのは全く別のことです。

私達はワシントンのジョージタウン大学に向かいました。この大学はイエズス会の大学であり、何日かそこで過ごしたい旨をあらかじめ手紙で知らせておいたのです。門では私達を英語しか話さないご婦人が迎えてくれました。旅の最中に覚えたいいくつかの英語では、私達が誰であるか、何をしに来たのかを説明するには不十分でした。スペイン語を少々理解できる神父が来てくれたので助かりました。彼はとても親切で全て解決しました。そこからそれほど遠くないウッドストックの神学院に泊めてもらい、そこで旅の次なるステップを踏み出すために勉強し、準備をしたのです。

様々な可能性を模索したのち、日本の方向にあるカリフォルニアまで行ったほうがよいとの助言を受けました。サンフランシスコにはイエズス会の日本への宣教師をアテンドする神父がいるとのことでした。そこでアメリカから日本という旅の最終段階を彼と調整することができるはずでした。途中、カンザス州のセントメリー神学院に数泊しながら北米大陸を列車で横断しました。アメリカでフィリピン人のイエズス会神学生と会いました。彼に私達は日本へ行くというと、「日本に行くですって。オー！私は日本人が大嫌いです」と叫んだのです。でもすぐに訂正しました。「ごめんなさい。キリスト教徒として、また聖職者として誰も嫌悪してはいけませんでした。でもそれは何と難しいことでしょう。日本人が私の祖国で行ったことを忘れることはできません。罪もない人々を虐殺し、私の家族も…」。

自然と出た彼の心情の吐露は私に衝撃を与え、心に残りました。先の世界大戦の悲惨さを犠牲者として味わった人との初めての個人的な出会いであり、やはり初めての直接的なインパクトでした。それまでは戦争、果ては原爆などに関して新聞などで読んだり聞いたりしていましたが、とても遠い他人事でした。始めはなすすべもありませんでしたが、話し合ううちに、やはりそこで勉強していたブラジル人のイエズス会士の助言もあり、彼は少しずつ落ち着きを取り戻し、最後には微笑んでこう語るまでになりました。「日本での皆さんの活躍を折っています。いつの日か私が日本の宣教師となることがあるかもしれませんかね」。

カリフォルニア ー サンフランシスコ ー サンタクララ

私達のアメリカ横断鉄道の旅は続きました。サンフランシスコに到着し、そこでイエズス会士のあたたかな歓迎を受けました。

すぐに日本に行く宣教師を受け持つ神父と連絡をとり、全ての準備を引き受けてくれました。おかげで私達は英語の習得に専念できました。英語の勉強には、やはりイエズス会の大学であり、サンフランシスコよりすこし北にあるサンタクララ大学を勧められ、快適な環境の中で3ヶ月間勉強しました。ありがたいことに、シェークスピアの言語を必死に学んでいる3人のブラジル青年を気の毒に思い、気晴らしのため、また戦争で日本に勝ち今では日本の復興を手助けしようとしているアメリカを少しでも知るために、カリフォルニアの美しい景色を見せてあげようと誘ってくれる人々がいつもいました。

勉強と散策を繰り返すなかで時は流れ、私達の旅が最終段階に入る日が近づいてきました。サンフランシスコから横浜です。太平洋の向こう側で一体何が私達を待ち受けているのでしょうか。

サンフランシスコから横浜へ

日本に渡るイエズス会宣教師をアテンドしてくれた神父のおかげで、私達 3 人のイエズス会士はサンフランシスコと横浜を結ぶ客貨両用の船に乗ることができました。

アメリカを横断する途中で立ち寄った多くのイエズス会の家で、終戦直後で物資が不足している日本では役に立つに違いないと、服をはじめ多くのものをいただきました。

船旅は快適でした。客船と貨物船の両用であるため利用客は少なく、20 人前後でした。船室も食事も最高でした。私達は船長に、一緒に食事をしようと誘われました。一方、船上の生活にはあまり変化がありません。ゆっくりと休養をとり、英語を勉強したり、他の客と英会話を実践することもでき、とても有意義でした。司祭がいなかったので私達は一つの船室に集まって折りをささげ、神と聖母マリアに私達の旅と将来への御加護、そして、この使命を果たすために私達を助けてくれた全ての人々に祝福をお与えくださいとお願いしたのです。気晴らしに船にそなえつけてあった様々なゲームも楽しみました。太平洋横断に要した 15 日間はまたたくまに過ぎていき、大きな嵐や問題もなく、船酔いにも苦しまずにすみました。

横浜から田浦（横須賀）へ（1949-1951 年）

横浜港に到着しました。船からでは、横浜の町が戦争で大きな被害をうけているようには見えませんでした。港は活気に満ちており、人々は埠頭でせわしなく働いていました。

最も印象的かつ衝撃的だったのは、アメリカ兵がいたところで全てをコントロールし、日本人に言葉よりはむしろジェスチャーで命令している光景でした。当時、英語を理解する日本人は希でしたし、日本語がわかるアメリカ人はさらに少なかったからです。戦勝国であるの連合軍が日本をコントロールしていた時代です。

埠頭で私達を待っていてくれたイエズス会士は、私達をすぐアメリカのジープに乗せ、横浜からほど近い横須賀、田浦のイエズス会日本語学校に連れて行きました。横須賀は日本海軍の重要な基地があった場所で、のちにアメリカ兵に占領されました。田浦は潜水艦の基地でした。そこにはいくつもの建物が立ち並び、中には高層の建物もありました。以前は日本海軍の建物だったそうです。私達が着いた時には、そのうちの 2 棟を、戦後日本に来たイエズス会宣教師のための日本語学校として使用していました。他の建物は、イエズス会による日本青年のための中高等学校で、現在でも有名な栄光学園のためのものでした。また、教会となった建物もあり、学園と近隣の人々のために使われていました。

学校に着くと、1 年前に来日したブラジル南部出身のイエズス会の仲間 4 人とブラジル中央部出身の 1 人が温かく迎えてくれました。他にもイエズス会士がおり、すでに神父になっている人もいましたが、大半は学生でした。国籍は様々であわせて 20 以上の国から集まっていました。各国語が飛び交っていましたが、一応英語が共通語でしたので、私達がアメリカに滞在して学んだことが大いに役立つこととなりました。

各自が自分の居場所をできるだけ確保しました。いくつかの建物や部屋はまだ悲惨な状況だったからです。初めて雨が降った日、私は部屋の雨漏りに傘や缶、バケツで対抗したのです。また、家具や机、

椅子、棚は日本人が空襲から身を守るために掘った近くの防空壕から調達してきました。

これらの決して小さくはない不便さに、私達は偉大なる宣教師的精神で太刀打ちしました。なぜなら、私達と共に働く、また私達が奉仕すべき日本国民はより大きな困窮に耐えていることをすぐに知ったからです。ゆえに、ブラジルやアメリカから服や日用品をつめた荷物が着いたときの喜びはひとしおでした。中でもとても喜ばれたのが、その後長い間学校内の礼拝堂で役に立つことになる小さなオルガンでした。大きな箱を開け、ノーヴォ・アンプルゴでいただいた靴を作るための大きな皮を取り出したとき、仲間は目をパチクリさせ、驚きと称賛の叫びをあげたのです。ほとんどの人がこんなに大きな皮を見るのは初めてだったからです。この皮で何足もの靴を作ることができました。

日本での初めての夜はぐっすりと眠ることができ、日本ではよくある地震がこの夜もあつたようですが、私は目を覚ましませんでした。翌日、学校の周辺を散策しました。するとかなりお年を召した女性がこちらに近づいてきたかと思うと立ち止まり、何も言わずに深々とお辞儀をするのです。私も立ち止まりましたが、どうすればよいのかわかりません。しかし、近くに私の他には誰もいないことから、彼女はお辞儀をしたに違いないと思い、私もとっさに同じようにお辞儀をしました。女性はまたお辞儀をします。私もお辞儀をします。彼女はお辞儀を繰り返し、私も繰り返し…。私たちはこの静かなあいさつを何回繰り返したかわかりません。私はもう充分ではないかと思い、お辞儀をするのをやめました。すると女性もやめました。最後に微笑んで軽くお辞儀をし、別々の道を行きました。

こうして日本での生活が始まりました。私の仕事と人生を捧げるべき日本国民の一人である女性に挨拶することで、日本での生活を始めることができたとは！予定では田浦に2年間滞在し、言語、歴史、文化、その他宣教師として働くのに必要であると思われるものを学ぶことになっていました。勉強はすぐに始められ大変でしたが、祈りの時間や、休養、また散歩や旅行、家庭を訪問することで人々や国を知ることができ、また立場の違いによって生じる習慣などを学ぶことができました。戦火を免れた寺院や歴史的、芸術的名所を訪ねることもできました。

日本語の勉強に関しては、私達の言語とは全く異なっているのでとても難しいことに皆気付きました。話し言葉と書き言葉を覚えなければなりませんでした。つまり、日本語を書くには3種類の文字を使うということです。漢字は約2千語、他の2種類は音をそのまま書くもので個々に46文字、その他文字を合わせて使うものがいくつかあります。普通に書くには鉛筆やペンを使いますが、筆もあります。筆書きはまさに芸術であり、日本人でさえ上手に使いこなせる人はわずかです。私はまず書道に挑戦しようと思いました。多くの紙と時間を使い、ようやくお手本通りに書けたと思い、先生に見せました。多少は誉めてもらえるだろうと思っていたのですが、先生は紙を手にとると、しばらく黙り、私の作品をじっと見て評価しているようでした。頭を左右にかしげ、言うのです。「正確に書いてありますが、何か足りない…。魂がこもっていないのです」。冷水を浴びせられたように、私の書道への熱意はさめてしまいました。

気晴らしのため、また故郷やガウーショ（リオグランデドスル出身者）の習慣へのなつかしさも手伝い、私達は時々集まってシマラン（回し飲みするマテ茶）を飲みました。シマランに使うひょうたん製の器や金属製の管（ストローのようなもの）を持参してきており、マテ茶も沢山いただいていた。シマランのおかげで私達は、日本語の勉強と新しい環境に適応するための力や元気を取り戻すことができました。

日本に来てしばらくは、駅で切符を買おうとすると駅員が頭を振り、切符は買う必要ないという仕草で

電車の方を指したのです。列車には占領軍の特別車両があって切符はいらなかったのです。日本人にとってみれば外国人は、たとえ宣教師でさえ無賃で乗車する占領軍に見えたのでしょう。しかし私達は初めから、占領軍ではないこと、従って特別車両ではなく一般車両に乗るのだということを説明し、というよりは説明しようと試みつつ切符を売ってくれるよう頑張ったのです。ようやく切符を買って一般車両に行くと、そこでも人々は特別車両を指差し、乗せてくれようとはしないのです。しかし少しずつ日本の人々に私達の存在と役割を理解してもらえるようになりました。

田浦で勉強した 2 年間には他にも様々な出来事がありました。ドイツ人の神父とスペイン人の修道士と私の 3 人がアメリカ軍警察に捕まってしまったのです。私達は気晴らしに横須賀湾でボート遊びをすることにしました。ボートに乗って、景色を見ながら静かに漕いでいて、引き潮のせいで少しずつ湾から出ていってしまったことに気付かずでした。何かおかしいとわかったのはボートの上空を小さな飛行機が旋回し、150 メートルぐらい離れた海岸ではアメリカ兵がそこから出るよう叫んでいるのに気づいた時でした。驚いた私達は、岸に戻ろうと一生懸命ボートを漕ぎました。でもどんなに漕いでも一向に進まないのです。それだけ強い引き潮だったのです。飛行機は上で旋回しているし、兵士達は叫び、手を振る。そして私達は絶望しながら船を漕ぐ…。こういった状態がしばらく続きました。船を出した岸には戻れないことがわかると、私達は兵士がいる海岸に向かうことにしました。でも船を近づけると、彼らは更に大声で叫ぶのです。「出て行け！出て行け！立ち入り禁止だ！」そこは軍の海域であり、許可を持たない者は入ることを禁じられていました。そうは言ってもどうしたらいいのか？どうすることもできず、意を決してそこで船を降りることにしました。地に足をつけた途端、兵士達に捕らえられその場で尋問が始まりました。「御前達は一体何者だ？どこから来たのだ？ここで何をしているのだ？身分証明書を見せなさい」。私達はイエズス会の神父と修道士で田浦の学校で勉強していること、ボートで湾をまわろうとしただけなのに、引き潮で戻れなくなってしまったことをできるだけ上手に説明しようと思いました。兵士達は何かコソコソと話し、私達をジープに乗せ、横須賀基地に連れて行きました。小さな部屋に連れて行かれ、常に兵士達に監視されていました。将校が来て、再び尋問が始まりました。私達はさっきと同じ事を繰り返し、書類は家に置いてきてしまっていること、田浦の学校に電話をするのが身分を証明する唯一の方法であることなどを説明しました。尋問は長引き、さんざん調べられた挙げ句、将校はようやく立ち上がり、部屋を出て行きました。電話をかけに行ったら違いありません。そして数分後、部屋に戻り、愛想よく微笑んで言いました。「おっしやる通りでした。今までの扱いをお許し下さい。しかしご存知のように、朝鮮で戦争が始まり、警戒措置をとらなければならなかったものですから」。解放してくれたことに礼を言うとともに、迷惑をかけてしまったことを詫言いました。彼は私達にコーヒーを出し、基地を少し案内してから親切にも送ってくれました。

記憶に残っている当時のもう一々の出来事は 1949 年、東京に聖フランシスコ・ザビエルの腕の遺骨が来たことです。1549 年、最初の宣教師聖フランシスコ・ザビエルの日本到着 400 年を記念したイベントです。私達の先行者であり守護者である聖人の歴史的遺物を拝見できたことは私の大きな喜びでした。私の喜びは格別のものでした。前述したように私が日本に宣教師として来ることを決意したきっかけは、間違いなく聖フランシスコ・ザビエルだったからです。

さらに私にとって重要な意味を持っていたのは、1950 年、東京にある大司教区の聖堂で受けた下級叙階です。これは聖職者になるための第一歩で、副助祭職と助祭職というより上級の叙階に先立つものです。この章を終えるにあたり、2 つの小旅行というか、訪問について記しておきます。その一つは富士山、3,776

メートルと日本で最も高い聖なる山です。1707年に最後の噴火が記録されている休火山で、東京から列車とバスを使って約4時間かかりました。日本人なら一生に一度は登るべきだと言われる山です。私も1950年の夏、登山することに決めました。なぜ夏かというと、他の季節は雪のせいで登山できないからです。夏でも雪は多少残っています。登山ルートはいくつかあり、頂上まで十合あります。当時は山裾から徒歩で登らなければなりません。現在は5合目までバスで登れます。当時頂上までは6時間かかりました。仲間と私は日の出前にちょうど頂上に着くよう計画を立てました。天気にもめぐまれ、まさに日の出の時刻に3,776メートルの高さから素晴らしい景色を堪能することができました。まさに日出ずる国でした。

同じ年、ブラジル人の仲間とともに東京外国語大学を訪問しました。この大学にはポルトガル語学科があると聞いていました。ポルトガル語を話す日本人の教員と学生に興味律々でした。外語大では心よく迎えていただきました。約束して行ったのですが、初めて会うときにはつきものの遠慮が双方にありました。しかし、少しずつ雰囲気が変わってリラックスできるようになり、大した問題もなくコミュニケーションがとれるようになりました。この大学は日本で最初にポルトガル語学科ができた大学です。この時は、1964年上智大学にポルトガル語学科を創設するため、私がこの大学と頻りに連絡を取り合うようになるなど知る由もありませんでした。私を助けてくれた初めての日本人教員はこの大学の教員でしたし、のちに来た3人もこの大学で教鞭をとっていたり学生として学んでいました。その内の一人は既に退職していますが、あと2人は現在でも私とともに学科で働いています。そこにも神のお導きを見出すことができます。

次から次へと冒険とも言うべき様々な経験を重ねるうちに、日本語の勉強のために当てられた2年間はあっという間に過ぎていきました。そして世界で初めて原爆が投下されたことで有名になった都市、広島への赴任が決まりました。そこで私は日本で新たな経験を積むこととなりました。

東京から広島へ（1951年）

日本語をはじめ日本の歴史、文化を学んだ2年間が終わり、イエズス会の学生（まだ司祭ではありません）は通常、学校や教区、その他の団体でもう一年実践経験を積みます。

私は広島市にある幟町教区に赴任しました。ここは広島司教区の本部でもあります。

東京から列車に乗り、長旅に耐えられる姿勢をとりました。当時はまだ新幹線は走っておらず、新幹線なら5時間前後で走る距離を20時間かけて走っていました。列車は混んでいて、廊下や列車の隅にも人が座っていました。食べ物はあらかじめ用奪していった方がいいと言われましたが、途中の停車駅でも買うことができました。ときどき、戦争で身体が不自由になった人が助けを求めて列車内を歩いてきました。流れゆく景色を眺める時間は充分にありました。まだ戦争の爪痕が残っている町、復興した町、野原や耕された農地に点在する家など。私にとっては全てが目新しく興味深いものでした。こうして横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、岡山といった主要都市を通過していきました。列車からでも空襲による被害がわかりました。また京都のように空襲を受けなかった町もいくつか見うけられました。広島に着いた頃にはクタクタになっていました。しかし、そこで私に何が待ち受けているのかといった好奇心は衰えを見せず、期待は膨らむばかりでした。

駅を出ると、心に迫る光景が飛び込みました。1945年8月6日に投下された原爆によって破壊された大きな建物のコンクリートや鉄の骨組みが、6年経過しているにもかかわらずいまだにあちらこちらに残っ

ていました。これらの残骸のほかは小さな家や急造のバラック小屋ばかりでした。

神父達の住まいは駅の近くにあると聞いていました。2階建ての家で屋根裏にはいくつかの小さな部屋とスペースがありました。原爆では破壊されませんでした。続いて起こった大火災で焼失してしまった家の基礎に立て直された家でした。原爆が投下された時には多くの神父がその家にいました。何人かは割れた窓ガラスの破片で負傷しましたが、神の御加護により一人も命を落とさずにすみました。その中の一人は今でも健在で、ここ東京の SJ ハウスで共に暮らしています。

そこでは大歓迎を受けました。特に、以前ブラジルで日本移民の中で働いたことのある、キルハー神父とトーラ神父（ともに故人）では大変喜んでくださいました。こうして私はすぐにここに溶け込むことができました。

私の仕事は教会の様々な活動を手助けすることで特に青年の世話を担当していました。私が幟町に来たときは、まだ教会独自の建物はありませんでした。私達はベルギー人のイエズス会士 E.ゴッセン神父が設立し、今ではエリザベト音楽大学としてその名を知られた音楽学校の広間を使用していました。

私が始めた活動のひとつはボーイスカウトのグループを作ることでした。個人的にはボーイスカウトに入ったことはありませんでしたが、この運動については何かで読んだことがあり、これは青年を集め人格形成をしていくのに良いのではないかと考えていました。知り合いになったボーイスカウトの市のリーダーから支援を受け、間もなく元気一杯で活動的な若いボーイスカウトのグループができました。

しかし、まだ教区の様々な活動にも慣れていないある晴れた日、音楽学校の校長が私を呼んで言ったのです。「どうですか。私と音楽学校で働くためにこちらに来ませんか」。この誘いを受けたときの私の驚きととまどいは、想像に難くないと思います。即座に答えました。「何ですって？私が音楽学校で働くのですか。私は音楽については実際、何もわかりません。その上、そこには音楽家の若いイエズス会士がいるのではないですか…」。校長は間髪いれずに答えました。「だから彼と君が交替するのです。君が音楽学校にきて、彼が教区に行く。音楽に関しては私に任せておけばいいのです。君は事務と管理、そして、いくつか他の教科を担当してください。もう主任司祭にはご相談し、賛成していただいています」。こうして決定されたのです。生徒がピアノやヴァイオリンなどを弾く部屋や広間に取り囲まれた一室に身を置くことになりました。バックミュージックが心を豊かにしてくれました。結局はここが気に入り、新しい活動に精一杯取り組むことになりました。翌年は神学を学びに行くことになっていたため、数ヶ月しかここにいられないことも全力投球する一つの要因になりました。この時は神学などの勉強が終わり、5年後に再びこの音楽学校で同じ校長と仕事をするようになることは、夢にも思いませんでした。時間の許す限り、ボーイスカウトの活動を続け、教区の活動も手伝っていました。

広島での1年は多くの貴重な体験を積んだ年となりました。人々や社会の様々な側面と直接ふれあうことで日本文化を知ることができ、また年長で経験を積んだ宣教師と知り合うこともできました。また、福音伝道には多くの方法があり、いつでも主に仕える用意をし、私達に相談しにやってくる人々の問題や熱意、要求などを理解しなければならないことを学びました。クリスマス・イブに私に会いに来た大学生を今でも覚えています。彼は信者ではありませんでした。私達は夜遅くまで様々な事柄について話し合いました。その中には宗教一般、キリスト教、特にカトリックも含まれていました。私の日本語のボキャブラリーはまだ限られていましたが、どうにか理解し合うことができました。この時、彼が私に言ったことで最も印象に残っていることは、「あなたたち神父や宣教師が宗教やキリストなどについて私達に話すことよりも、本当に私達が知りたいのは、あなたたちが私達に教えていることを自分で実践し

ているのかどうかです」という言葉です。この言葉は私に自省と祈りを促しました。「言葉は感動を与え、模範は人々を従える」という古い諺や、敬愛する教皇ヨハネ 23 世の「もし私達がみな良きキリスト教徒として生きてきたならば、今では異教徒がいなかったはずであろう」という言葉を思い出しました。

広島での 1 年間はまたたく間に過ぎていきました。音楽学校での活動については、1957 年、再び広島に戻って来た時のことを書くまでとっておきましょう。

もう一つ忘れられない出来事がありました。ある時、自動車で、ある神父（故人）と私でボーイスカウトのグループのキャンプ地にミサをあげに行ったときのことで。ほとんど車が通っていない道を走っているとき、神父が私に尋ねました。「ハンドルを握ってみたくないですか?」「でも運転はできません。ハンドルを握ったこともありません」と答えました。「でも簡単ですよ。ほらね」と彼は言うのです。結局私が運転席に座る羽目になりました。でも数メートル走ったら怖くなり、神父と運転を交替しました。やれやれとんだ目に合ったと思っていたら、帰り道、広島市内に入り宿舎からそれほど遠くないところで神父が突然車を止めて言うのです。「私はここで用事があるから宿舎まで車で帰ってください」。私は仰天して言いました。「でも私は運転できないとさっき言ったではないですか。それに…」。「あなたは私が運転するのを見ていたし、さっき少し試したでしょう。さあ、運転して帰ってください」。彼は車を降り、私は一人で車に置き去りにされました。私は軽い目眩を感じました。でも「さあ」という言葉が耳に響き、観念して運転席に座りました。車がどう発進したのかも覚えていませんでした。最初の赤信号に気付いたのは、既に交差点を通過したあとでした。幸い、交差する車はいませんでした。また宿舎の門はあいていて、門の支柱を倒さずにすみました。こうして気付いたときには車は車庫に入っていました。どうやって入ったかって?それは「神のみぞ知る」です。いずれにしても神と、私を守ってくれた天使に感謝しました。それ以来私は一度も運転していません。

日本からヨーロッパへ (1952 年)

広島での別れ

広島での実務経験のための 1 年は瞬く間に過ぎていきました。私は神学の勉強をしなければならなかったのですが、当時日本で神学を学べるどころはなく、翌 1953 年に開校の予定でした。上司達には広島でもう 1 年お手伝いを続けられることを伝えました。その後日本で神学を学ぼうと思っていたのです。なぜなら、私のにわか覚えの日本語で 4、5 年国外に出てしまっただけでは後で苦勞することになると思ったからです。しかし彼らは神学の勉強をできるだけ早く終わらせた方が良いと思っていたようです。また、アイルランドが日本のイエズス会士のために 1 人分の奨学金を用意しているとのことでした。アイルランドはゲール語という独自の言語がありますが実際はあまり使用されておらず、英語が公用語だったので私の英語を上達させる機会にもなるとのことでした。

広島に別れを告げる時が来ました。原爆に苦しんだ広島は、私が具体的に、また直接すべての年齢層、階層の日本人と直接触れ合う機会を与えられた愛すべき場所です。彼らの多くが身体に、よりまして心に原爆の傷痕を残していました。この 1 年で多くの美しい思い出を作ることができました。町と生活の復興に向けた人々の意欲や努力を見、共有し、時には励まし、支えることができました。確かに簡単なことではありませんでしたし、やるべきことをすぐに実現できたわけでもありません。しかし、子ども達の喜びや勉学や仕事に対する青年や大人の熱意と意欲、そして友愛と団結との精神で助け合う姿を見

ることができたことは私にとっても喜びでした。

広島を去るのは残念でなりませんでした。東京への列車に乗るとき、広島駅で神父や音楽学校の教師、職員、生徒、教会のグループ、ボーイスカウトの私のグループや他のグループの代表との別れは私の心を大きく揺るがせました。ブラジルを後にするときよりも感慨深いものでした。その時は5年後、完全に再建された近代的で美しい広島に戻ってくることになるとは思いもよりませんでした。それについては、また後で触れます。

広島からローマへ

イエズス会の数人の仲間との日本からイタリアへの旅は水川丸という船での旅でした。この船は戦争で唯一沈没を免れた船だと聞かされていました。しかしとても良い船で、装備もしっかりとしており、快適でした。無事故で航行を終え、約1カ月後、イタリアのジェノバに入港しました。

当時、現在リオグランデス州サンタマリアの司教である私の弟のドン・イヴォがローマでの神学の勉強を終えたところでした。彼は、私がイタリアに着くのと同時期に叙階することになっていたのですが、私は上司達にお願いして彼のローマでの司祭叙任式に出席できるようお願いしたのです。ジェノバに着いた時、ローマの院長からの手紙に驚きました。そこには「ローマにおいてください。しかし、あなたの弟は叙階されません。彼は入院しているのです」と書いてありました。一体何が起こったのだろう、と心配でなりませんでした。ローマに着き、彼が事故にあったことを知りました。すぐに見舞いましたが、ありがたいことにその時にはもうとても元気になっていました。しかし、叙階はいつ行われるのかまだ決まっていなかったのです。私は神学の勉強をするためアイルランドのダブリンに行かなければならず、これ以上ローマに滞在する時間的余裕はありませんでした。

ロンドンからダブリンへ

生まれて初めてのヨーロッパでしたが、友人の家や観光地を訪問する時間はあまりありませんでした。ローマで列車に乗り、イタリアを縦断してフランスのカレーに向いました。カレーでイギリス海峡を越え、イギリスのドーヴァーに向かう船にのりました。ロンドンで数日過ごし、アイルランド海を渡る船に乗るため、ホリーヘッドに向かいました。そして最終目的地であるダブリンに到着しました。

まず、中心街からすこし離れたミルタウン・パークにあるイエズス会神学校に行くため、タクシーを探すことにしました。しかし、探せど探せどタクシーは見つかりません。近くに居たのは馬車だけでした。仕方なく御者に近づき「タクシーはどこで拾えますか？」と尋ねました。彼は少し驚いた顔で私を見たあと、すぐに微笑んで、馬車を指して「ここに1台あるさ。お乗りよ。」と言うのです。少しとまどいましたが、ひとまずホッとして馬車によじ登り、荷物と一緒に乗り込みました。馬車は快適でさえありました。こうしてミルタウン・パークに向かったのですが、まるで旅から帰った封建時代の領主のような気分でした。神学校に近づくと、入り口のドアがあき、誰か出てきました。馬の音で馬車が近づいて来たことがわかったのでしょう。彼は私の到着の連絡を既にうけていた門番の修道士でした。こんな馬車できたことをおかしいと思わないかと聴くと、彼は笑って「いいえ。ここではまだ馬車は一般的なのです」と答えました。わたしはすぐにここが気に入り、くつろぐことができました。

4年間の神学生生活に紙面を割くことはしません。多くの素晴らしい、面白い、そして時に苦い経験や出来事がありました。その全てが、年を重ねる上でも、知恵や人格を深める上でも役立ったことと思いま

す。

この期間の総合的な印象と見解をいくつかあげるとすれば、アイルランド人は、その歴史と生活にまだに残るイギリスの影響に苦しみ、感情を害してはいますが、親しみやすく、陽気であるということです。地理的にも孤立しているばかりでなく、人々は文化的にも人間的にもアイルランド以外の世界から孤立していると感じているようです。神学校でも勉強に直接あるいは間接的に関係ある新聞や雑誌ですら手に入れるのは容易ではありませんでした。

1953年の夏、スペインのコルドバで日本語講習に参加しました。この講習は、私と同じようにヨーロッパで勉強しているイエズス会の日本の宣教師のためのものでした。仲間と再会し、決して簡単には習得できない日本語を使う良い機会となりました。

司祭叙階 (1955年)

時は過ぎ、待ちに待った司祭叙階の日が近づいてきました。

当然のことながら、修行中、私を精神的、物質的に支え、祈ってくださった方々や両親、兄弟、親戚の出席のもと祖国で叙階を受け、最初のミサを立てたかったのですが、それは不可能でしたし、彼らがアイルランドに来ることもまた不可能でした。日本からも同時期にアイルランドで勉強していた数人の仲間が同席してくれるだけでした。

そこで目には見えませんが最も大切な方々、すなわちイエスとマリア、そして守護聖人たちが見守る中でこれらの大切な日々を過ごすものと観念していました。しかし、彼らが私に哀れみを感じ、この大切な日に人間味をそえて下さったのです。

司祭叙階の日、ダブリンにある神学校の礼拝堂で 1955年7月28日と決まりました。

私は当時、ダブリン駐在のブラジル領事、ヴィセンテ・パウロ・ガッティ氏とコンタクトがありましたが、それはプライベートなものではありませんでした。領事は私の叙階式を知るととても興味を示してくださり、その日はブラジルの私の両親や親戚が出席してくれるのでしょうかとおつしやいました。誰も来られないと答えると、彼は「何て残念なのでしょう」と叫びました。短い沈黙の後、彼は「一つお願いがあります。私と妻があなたの両親の代理として叙階式とミサに参加することはできませんか。私達にとってもとても喜ばしく光栄なことです。いかがでしょう」と言うのです。私は驚き、この予期していなかった提案に感動していました。そしてすぐに「ありがとうございます。領事のそのお心遣いと優しさに心から感謝いたします。私の両親もそのご親切をどんなに喜ぶか知れません」と答えました。

こうして事は運び、私の叙階式には私の家族を代表して領事と奥様、お子さんが出席してくれました。彼らの他にダブリンの友人や知人も来てくれました。最初のミサは、近くにある学校のシスターに招かれて、学校内の礼拝堂で行いました。領事の御家族や友人や知人、多くの学生が出席してくれました。私のブラジルの家族や親戚、友人の不在を補おうと力を尽くしてくれる皆さんの心に感動しました。彼らへの感謝の思いは今も変わることなく、同じ思いと喜びをもって祝福されたあの日々を思い出します。この時点ではもう1年ダブリンでの生活が残っていました。しかし、司祭になったので、教区や学校の活動を手伝うことができました。ありがたいことに、私の英語力は信者に應對したり司祭としての任務を果たせるぐらいになっていました。しかし、時々一度も勉強したことがなく、ダブリン地域では実質的にもうあまり使われていなかったゲール語を話す人々がやってきました。

神学の勉強も最終年に入っていたので、第三修練期（イエズス会の創設者である聖イグナチオ・デ・ロヨラ

の精神を学び、実践すること)をどこで行うかを決めなければなりません。これは通常、神学を学んだ直後に行われるものです。

どこでこの最後の勉強をし祈りを捧げようか。いくつもの選択肢が示されました。ドイツを含むヨーロッパ各地です。様々な可能性を考慮した上でドイツで行うことに決めました。

アイルランドからドイツへ (1956-1957年)

1956年、アイルランド・ダブリンでの神学の勉強が終わりました。前述したように、イエズス会の創設者である聖イグナチオ・デ・ロヨラの精神を学ぶための最後の1年をドイツで過ごすことに決めたのには様々な理由がありました。その中でも私の祖先の土地、国民、文化、豊かな芸術・文学・宗教を肌で感じたいというのが最大の理由でした。もちろん一年で充分だとは思っていませんでしたが、少なくとも直接触れることで、何かを学ぶことができると考えたのです。わたしのドイツ語が完璧でないこともわかっていました。子どもの頃家ではドイツ語を使っていましたし、当時私の住む地域にはまだポルトガル語の学校がなかったので小学校も最初の2年間はドイツ語を使っていました。従ってドイツ語でもゴシック字体の読み書きはできたのです。家で使っていたドイツ語はいわば「Kuchendeutsch」、つまり「台所のドイツ語」で、家庭で使われたものであり文語とは別のものでした。それに加え、ドイツ南部フンスリュック方言が強かったのです。小学3年生からはポルトガル語で勉強し始めました。

脱線してしまったので、この辺で話しをもとにもどしましょう。

1956年、アイルランドからドイツに入りました。第三修練を行うため、この年で修行は終了します。場所はセントマリゲン・ハウスで、ミュンスター市郊外の修練所です。ここは公園の木立の中にあり、とても快適で勉学と祈りにはうってつけの場所でした。ドイツ人、オランダ人、フランス人、アメリカ人、そして私ブラジル人といったように様々な国籍の神父が集まっていました。

ミュンスターで勉強が始まるまでまだ多少日があったのと、わたしのドイツ語で日常生活には困らなかったことから、あるボーイスカウトのグループをドイツ南部にキャンプに連れて行くよう頼まれました。興味があったのと、広島でもボーイスカウトのグループを組織したことから、良い経験になればと引き受けました。その通りでした。彼らドイツ青年を活気づけた精神は日本の青年と実質的には変わりませんでした。それは自身の成長と他人への奉仕です。

セントマリゲン・ハウスでは勉学と祈りに勤しんだので、ここで特に書き加えることはありません。空いた時間の大部分は修練所以外の経験や活動に駆り出されました。

しばらくハンブルグの教会に滞在し、手伝いをしていました。既にかいたように、日常生活を送る上では私のドイツ語でも間に合いましたが、説教や座談会では不便を感じました。ある時、座談会が終わると参加者が私に言うのです。「あなたは19世紀の美しいドイツ語を話されますね」少しショックでした。確かに私のドイツ語の大部分は、19世紀後半ブラジルに移民し二度と帰国しなかった祖父母が使っていたドイツ語と同じであったことを気に留めたことなどなかったからです。私の両親はブラジル生まれで、ドイツ語は祖父母が伝えた通りに保たれてきたのでした。ブラジルに渡った日本人移民の場合も同じ事が言えます。彼らの子孫の話す日本語は明治時代のものなのです。

ミュンスターの病院で1ヶ月間働いたことも私の興味深く有意義な経験となりました。「この1カ月間あなたは神父としてではなく看護師補助としてこの病院で働くのです。病院の礼拝堂の神父が不在だったり不可能だったりというやむを得ない場合のみ、あなたは司祭としての任務を果たしてください。あと

は看護師や看護婦の助手や補佐として、彼らの言う通りに働いて下さい」と最初に言われました。

こうして朝から晩まで毎日、配膳やベッドメイク、病人の身体を洗うといったことをはじめ、病人の世話をしたり要望に応えたり、特に身寄りがなく孤立している患者の話を聞いたり励ましたりしました。これらの仕事は全て、看護師の訓練を受けていない私にもできるものでした。

しかしある日、いまでもはっきりと覚えています、驚くべき出来事がありました。医師の一人が私を呼んで言うのです。「これから患者に注射を打ちます。私と一緒に来てよく見ていてください。そして次はあなたが注射を打って下さい…」「でも私は注射など打つたことはありません」と反論を試みました。

「それはわかっています」これが答えでした。「難しいものではありません。私をよく見ていてください。大事なことは打つ前に注射器の中の空気を完全に抜いておくことです」。私は医師に付いていき、彼の動作の一つ一つをじっと見ていました。実際、あまり難しそうではありませんでした。医師は私に注射液と注射器を渡し、大部屋のドアを開けました。彼は一人の患者を指差し、「あそこにいる青年に注射をして下さい。わかりましたか？」と言いました。私がうなずくと、医師はきびすを返して行ってしまいました。深呼吸のあと短い祈りを捧げ、意を決して青年が横たわっているベッドまで行きました。彼は私を見ると少し不審に思ったようです。私は彼に落ち着いて微笑みながら言いました。「怖がることはありません。小さな注射を打つだけです。さあ少し横になって、こう…青年は尋ねます。「あなたは医者ですか？」私は正直に言いました。「いいえ。私は医者ではありません。看護助手です」注射をセットし、処方しました。うまくいきました。患者は小さな声で「イタ！」と言いましたが、すぐに落ち着きました。しかし本当にホッとしたのは私です。そうは言っても少し心配になって、しばらくしてから彼の様子を見に行きました。彼は元気で、彼と少しおしゃべりをしたことで、彼より私の方が良くなった気がします。

1ヶ月間の病院での仕事、つまり医師や看護婦（看護師は少ししかいませんでした）との触れ合いや、体だけではなく精神的あるいは心理的に病んでいて誰か話をきいてくれ、励ましてくれる人を求めている患者の世話をすることで得たものはとても大きなものでした。患者のベッドメイクや病人の身体を洗うといった控え目な仕事をしている私が、神父であるとわかった時は大変でした。私が彼らに近づくと、彼らは抵抗して言うのです。「でもあなたは神父です。これは神父の仕事ではなく看護婦や看護助手の仕事です。私は、これは神父や聖職者のためのとても有意義な修行であることを説明しました。すると彼らはそれを受け入れ、満足してくれ、いつでも会いに来て下さいと言ってくれました。

病院での経験はあっという間に終わりました。肉体的には少々疲労していましたが、精神的、また人間的に私をととても豊かにしてくれました。

ドイツ滞在中、いまでも私の親戚が住むドイツ南部ザールラントという先祖の地を訪ねることができました。そこでシュタインバッハという小さな町の教会の手伝いをして過ごしました。家庭や病人を訪ね、祖父母の時代の話の話を聞きました。また、この地方の主要な町であるザールプリュッケン、ザンクト・ヴェンデル、トリーア、そしてミュンヘン、ケルン、ボンなどを訪れることもできました。最後に訪れた地方で家庭を訪問した時、言葉が全く理解できず、私が両親や祖父母から学んだ方言とは全く異なる方言を聞き、とても驚きました。

学ぶべきことはまだまだ数多くありましたが、私のドイツ滞在の期限は迫っており、日本への帰国を考えなければなりません。学校で少しかじったフランス語の上達のためフランスにしばらく滞在したい気持ちもありました。しかし日本から、ヨーロッパに渡る前に少し働いた、その時すでにエリザベ

ト女王音楽大学となっていた広島为学校が私を待っている、すぐに戻るよう手紙が来ていました。実は、8年以上会っていなかった親戚や友人に再会するため、ブラジルに短期間滞在する可能性も探っていました。しかし日本で私を待っていると、直接帰ることにしました。

当時日本に帰るのに最も簡単な手段は、マルセーユ港から出ているフランスのメサジェ・マリタイム社の日本行きの船であると言われました。言われた通りの船に乗り、5年前あとにした第二の故郷日本に無事到着しました。

広島へ（1957～1959年）

1957年10月、私の第二の故郷日本に再び上陸しました。しかし、私の目に写った日本は1949年に初めて来日した時とは大きく異なっていました。

日本は戦争による荒廃から、かなりの復興を遂げていました。最も印象的だったのは、灰と瓦礫の中から完全に立ち直った新しい広島の姿です。1951年に初めて広島に来たとき立ち並んでいた避難所や住居用のパラックは、既ありませんでした。今では広くて美しい道路が通り、通り沿いには立派で近代的な建物が建っていました。

小さかったエリザベト音楽学校も音楽大学となり、広くて近代的な建物を校舎としていました。私の帰国後の身元引受人でもあった学長は当時と同じエルネスト・ゴッセンス神父でした。彼は私を強く抱擁して歓迎してくれ、すぐに教師陣や職員に私を紹介しました。私は彼らのほとんどを既に知っていました。彼らの心からの歓迎が、私にはほとんど造詣が無い音楽という分野で、すぐに仕事にとりかからなくては行けないという私の不安を取り除いてくれました。しかし神が私をここに派遣した以上、私に期待されている大学の管理・運営、総合調整といった仕事をたせるよう努力しました。また英語とドイツ語の授業を担当するようにも言われました。このように、私がやるべき仕事は山積していました。

しばらくして衝撃的な出来事が起こりました。ある日、学長が私を部屋に呼んで椅子をすすめ、彼も正面に座っていたはずらっぽく微笑んでいました。「多分、あなたは私の話に驚くかもしれませんが。あなたはここの仕事にすっかり慣れたし大学がどのように機能しているか全て知っています。従って私は半年間休暇をとり、私の故国ベルギーとヨーロッパでいくつかの調査をしたいと思っています。その間、あなたに学長代理をお願いします」

私の頭の中で爆弾が爆発したようでした。そして音楽大学の学長代理になることに何とか抵抗しようと考えていました。しかし学長は私の言葉を遮り、「心配はいりません。もう主要な教授や職員には言っているし彼らも賛成しています。彼らもあなたなら半年間学長代理が務まると思っているし、手助けしてくれます。これで私も心置きなく休暇がとれ調査に出かけることができます。」

こうして決められてしまったのです。数週間後、学長は出発し、私がタクトを振ることになりました。当然のことながら最初の2、3日は不安で一杯でした。しかし、周囲の教員や職員、秘書が私の立場を理解してくれており、みな協力的で親切でした。思い出すと今でも皆さんへの感謝の思いで一杯になります。主宰するべきいくつかのセレモニーの中でも、卒業式と入学式は大変でした。幸い、つつがなく終えることができました。しかし正直いって、全ていつものようにうまくいったとしても、私は一度たりとも安心できませんでした。そうは言っても、教員と学生による演奏会、隣接していた礼拝堂でのセレモニーや厳粛なミサへの参加、小旅行、個人的に語らうインフォーマルな集いなど、たしかに良い思い出となった出来事もありました。とても実り多い経験を積ませていただきました。

学長が帰国した日はとても安心したことも事実です。落ち着いて以前のように仕事を続けることができました。

こうして時は過ぎ、1958年の年末、東京の管区長からの手紙を受け取りました。それはもう一つの爆弾でした。管区長の手紙を要約すると、東京にある上智大学がブラジルに関するコースの創設を計画しているとのことでした。大学にはブラジルの言語、文化などを勉強できるかという問合せや要請があるとのことでした。様々な理由があると思いますが、その大部分は当時ブラジルに移民を考えている日本人が数多く存在していたことによるものでしょう。しかしながら、大学にはポルトガル語やブラジルに関する情報を知る人は誰もいなかったので、日本にいるブラジル人のイエズス会神父を一人呼ぼうということになったのです。様々考慮した上で私の名前があがったそうです。最後に管区長は、あなたに上智大学に行くよう一方的に命令するつもりはない、数日よく考えた上で新しい仕事を引き受ける決意ができれば連絡して欲しいと書いていました。

大学で働くなど考えたこともありませんでした。一方で、この新しい活動分野に人が必要で私が候補になったのなら、それは神の御意志であり、神は新しい私の使命を信頼し、それを成し遂げるために助けてくださるであろうことを疑いませんでした。

ゴッセンス学長の意見を聞きにいきました。私が管区長からの手紙を見せると彼はすぐ言いました。「知っていますよ。同じ内容の手紙を私ももらいました。もう決心はつきましたか?」「はい。まだはっきりとは決めていません。まず学長の御意見を伺いたかったのです。どう思われますか?」学長は明快でした。「個人的にはここで私とともに働いてもらいたい。でも上智大学の計画もとても重要ですし、あなたの個人的状況を考えてもきっと新しい仕事を引き受けた方が良いでしょう。あなたも東京の新しい環境の方が今より伸び伸びと働けるでしょう」。

学長の理解のある優しい態度が私の心を大きく揺り動かし、感謝の思いで一杯になりました。こうして決心ができ、管区長に、新しい仕事を引き受け、精一杯努力し期待にお応えしたいと伝えました。

こうして、上智大学で新しい活動を始めるため、1959年初頭東京に行くことになりました。

(第1巻終わり)